

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 90 Sep.

＼ 近づこう！ 身近な自然 ／

うら 博物館

通学路にとけ込む緑

まちのなかでも鳥観察

小さな森が教えてくれたこと

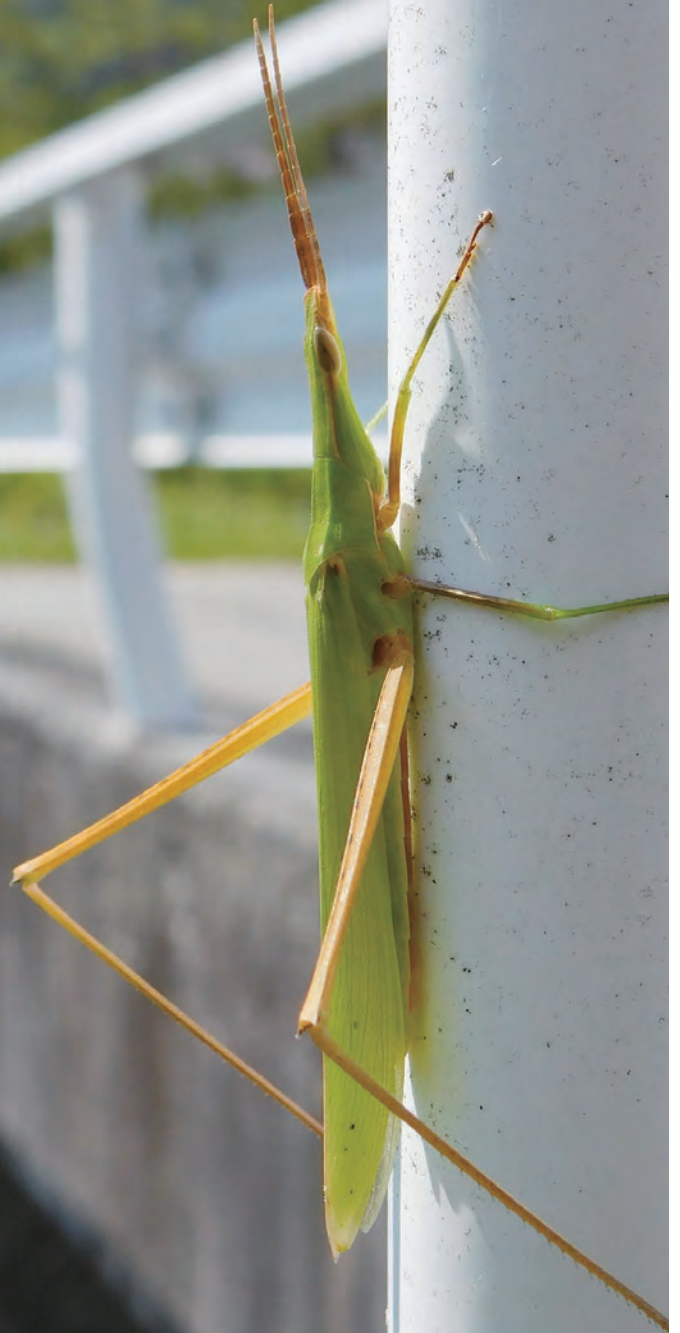
私の知らない、うら山を歩く

連載 都留の山々を歩く 第1回 九鬼山

はじめての観察

小さい世界

生きる姿に出会ったとき



04 特集

\ 近づこう！身近な自然 /

うら山博物館

06 通学路にとけ込む緑

08 まちのなかでも鳥観察

10 小さな森が教えてくれたこと

12 私の知らない、うら山を歩く

14 連載 都留の山々を歩く 第1回 九鬼山

16 はじめての観察

17 小さい世界

18 生きる姿に出会うとき

22 フィールド暦

23 知ればわかる、畳の「よさ」

26 工芸たけだを訪ねて

28 ならやのお菓子里に込められたもの

30 日常からすこし離れて

32 ぶれない生きかた ー有限会社リードを訪ねてー

34 広がる世界は自分のもの

36 まちのでんき屋さん

40 三浦養蜂園 前編 身近なミツバチ

44 センサーカメラが写した動物たち

45 つるのひとこま



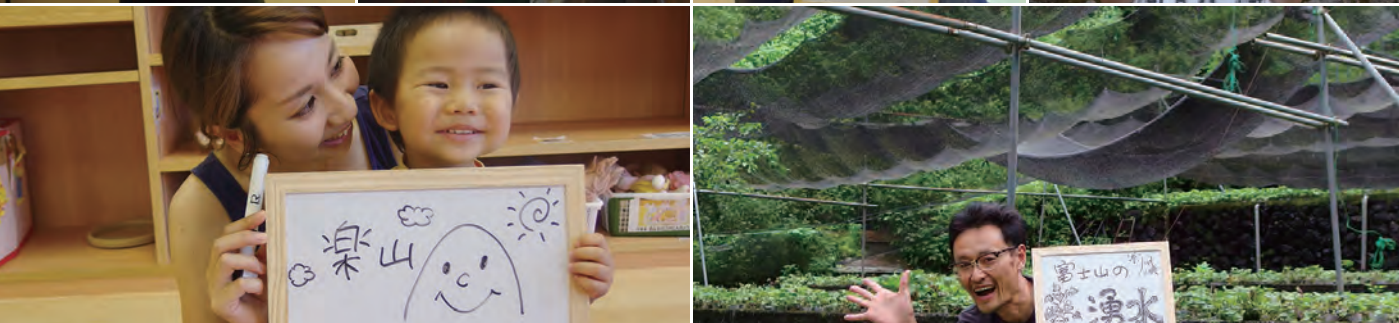
..... 表紙写真

朝日曾雌の川のわきでショウリョウバッタがガードレールにとまっています。のんびりひなたぼっこでもしているのでしょうか。(2016.08.05)

江利そらむ＝撮影



あなたにとって
身近な自然とは？



\ 近づこう！ 身近な自然 / うら山博物館

生きものや自然と出会い学ぶことができるうら山を
「うら山博物館」と名付け、前号から特集してきました。
うら山に「博物館」という建物はないけれど、
本物の生きものから、さまざまなことを学べるこの場所は
まるで屋根のない博物館のようだったからです。

でもうら山に行かなくても自分だけの博物館は見つけれられると思います。
地域のかたがたに「身近な自然とはなんですか」とうかがってみました。

すると、散歩道、公園、畑……と答えはさまざま。
この場所も見方しだいで屋根のない博物館になるはずです。
私たちもうら山から、もう少し身近な場所へ出かけてみました。



通学路にとけ込む緑

私は授業があると、ほかに用がないかぎり決まった道を歩く。大学まで片道15分ほどの通学路だ。アパートは上谷の普門寺付近にあって、そのあたりには民家が多く道幅は狭い。途中国道139号線に出たあたりから、学生とすれ違うようになる。

この通学路をとおっていると、いろいろな植物を見かける。細長い葉が目立つイネ科の植物やタンポポ、オオバコなどが生えている。ただ歩いているだけでも、植物の緑色が視界に入ってくるくらい、私の通学路には緑がある。そんな道を使って登下校するのが私の楽しみだ。

ただ、通学路に生えている植物を一つひとつ調べたことはない。好きな草や花があったら少し立ち止まって見るくらいで済ませてしまう。当たり前のように生えている身近な植物たちを、改めて観察することで何か発見はないだろうか。カメラを片手に歩いてみた。

アパートから大学を結ぶ私の通学路。その道の脇にはいつも植物が生えている。山でも草原でもないまちのなかで、植物はどのように生きているのだろう。

南條新（初等教育学科3年）＝文・写真

どこにもある隙間から

毎日のようにとおる道を改めて見てまわった。植物はそこら中で見つかる。とくに畑の隅っこや民家の駐車場、空き地といった場所には、まとまって緑が生い茂っている。やっぱり土があるところに多い。ねこじやらしと呼ばれるエノコログサが生えていたり、キク科の仲間が白い花を咲かせていたりした。

ただ、一見土がなさそうな道端にも植物は生えている。カーブミラーの柱を囲むようにコンクリートで固められた地面から、ユリの仲間が2輪も生えていた。しかも白い花が咲いている。根元をよく見てみると、柱とコンクリートとのあいだに指が1本人るくらいの隙間があった。小さな隙間で生長する姿が力強く見えた。

ほかに生きるには大変そうだけど、植物がいるところがあった。溶岩を積んでできた

壁の、岩と岩との隙間から。ほんの数cmしかないアスファルトの裂け目から。土がなさそうで、窮屈そうなところでも、植物を見るこ

上へ伸びる工夫

観察を続けていると、道路とコンクリートブロックのあいだからセイヨウタンポポが生えているのを見つけた。狭いところからよく芽を出したなと感動した。

でもそのタンポポは、よく見ると形が変わっている。タンポポはふつう、根の位置を中心に丸く広がるように葉をつける。それなのにこのタンポポの葉は、ブロックに沿って広がっている。茎もまっすぐ真上に伸びるのではなく、少し斜めに出て、そこから上を目指して曲がっていた。

水路のU字溝から生えるセンダングサも似たような生えかただ。根元は壁から真横に出ているのに、上に伸びるにしたがつてまっすぐになつていた。植物はどこにでも生えている。ただ、場所を選ばないというよりも、どうやらその場所に合わせた工夫をして生えているようだ。



水路の溝から生えるセンダングサ。水面すれすれまで茎を伸ばしている

私にとって、道端に植物があることは当たり前のことだ。どうしてこんなに植物が多いのかを調べてみると、まちなかのちょっとした隙間でも生きていけるくらい、植物が力強く柔軟だからだと気がついた。今までは、通学路で見かける植物をただ眺めるだけだった。けれど今は、植物がどんな工夫をして道端で生きているのか気になるようになった。道端の植物について考えながらの登下校は、ただ歩くよりもおもしろい。



左：ヨウシュヤマゴボウが電信柱の脇から生えていた。白い花が咲いている
中央：高さ3mくらいの壁の、岩と岩とのあいだから植物が生えている
右：コンクリートの隙間から生えるユリの仲間。茎のてっぺんまで40cmくらいある



まちなかでも鳥観察

私は前号、うら山での私なりの鳥の見かたを紹介した。鳥を見にうら山へ行くことも多いが、ふだん学校へ向かう途中でも鳥を見ている。ちょっと目を向けるだけで、退屈な道も気軽な観察場所になるのだ。



(2014.05.24)

上：キセキレイがエサをくわえて電線に止まっていた
左：畑のビニールハウスの骨組みに止まっていたジョウビタキ
右：民家すぐ近くの木にムクドリの群れがいた。一匹だけスズメが混じっているのがおもしろい
(写真はすべて十日市場で撮影)



(2014.12.19)



(2015.02.03)

まちでの鳥の見かたは、山のなかとほとんど変わらない。見る先が街路樹や電線などに変わっただけだ。ただ、まちを歩いているときは鳥を見ることが多いので、ゆつくり鳥を観察することはあまりしない。

山よりも視界を遮るものや鳥が隠れるところが少ないぶん、まちなかのほうが見やすいこともある。少し歩いただけでも、あつヒヨドリがいた、声が大きくて目立つなか、ムクドリの群れのなかにスズメが一匹混じっている、キセキレイが虫をくわえているなどというように、さまざまな鳥の姿に気がつくことができる。

ツバメやジョウビタキなどは、まちなかでも見ることができると渡り鳥だ。私はこれらがやってくる季節が近づくと、姿を見られる日はいつになるのかと楽しみにしている。渡りの時期に初めてその鳥を見たときは、無事に渡ってこられたのだなと嬉しくなる。季節が変わっていくようすを鳥からも感じるのだ。

そんなふうに歩きながら、鳥を見ていると、見かけた鳥の行動が気になるときがある。本

この前切られた木に巣を作っていたカラスがここに作り直したのかはわからない。けれど、あのカラスたちが新しく巣を作ることができたのかもしれないと思うと嬉しかった。

それから毎朝通るたびに見ていると、やはり二羽でいることが多い。これから卵をかえすのだらうなと楽しみにしていた。すると、今度は並木の枝がクレーン車によって剪定されていった。切っている最中をたまたま見ることができたが、そのときはまだ巣のなかにカラスがいた。鳴き声を上げながら巣のなかで羽をバタバタさせている。その日の夕方によ



本学前の坂の並木に作られたカラスの巣(2016.04.23)

学の近くで見つけたカラスのようすもその一つだ。

カラスの巣作り

4月上旬、本学前の交差点付近から上谷方面へ向かう路地をいつものように歩いていると、ハシボソガラスが枝を運んでいるのを見かけた。くわえていた枝の長さはカラスの体長と同じくらい。カラスの平均的な大きさが50cmほどだから枝もそれくらいになるだろう。飛んで行った先を注目して見てみる。巣材に使う枝だろうと思ったからだ。遠くへ飛

うすを見に行くとカラスの巣は無事だったが、これ以降、巣でカラスを見かけることはなかった。おそらくこのカラスたちはここで巣作りをやめてしまったのだろう。その後、付近で新しい巣を見かけることはなかった。どこか別の場所で巣を作ったのだろうか。カラスがいなくなり、観察はそこで終わってしまった。それでもしばらくのあいだ、通学路は私にとつてただ通る道ではなく、観察の場となっていた。

まちなかにも、さまざまな鳥がいる。鳥はいつも同じ所にいるとはかぎらないから、どこでどんな鳥の行動に出会えるのかは、その日ごとの楽しみだ。枝を運んでいたカラスの行動のように、どうしてそんなことをしているのか気になって、また見てみたいと思うようになる。私の観察はそこから始まっていく。

毎日歩く同じ道も、鳥に目を向けてみるといつもとはちがった景色に見える。まちなかで鳥を見ていると、今日はどんな鳥に出会えるのだらうかと、ふだんの生活のなかに新たな楽しみが増えるのだ。

小俣溪和(社会学科3年) 文・写真



車に乗っているとき、前の車にイソヒヨドリが止まっていた。最近都留市内で増えてきている鳥だ (2016.06.04)

小さな森が 教えてくれたこと

本学附属図書館横ビオトープ（※）に生える植物のほとんどは、大学の近くに自生するような木や草花。ここはいわば学内の小さな森だ。私は週に一度この森の手入れをおこなってきた。

ビオトープの整備に誘われたのは大学1年生の秋のこと。正直に言うと、それほど自然が好きではなかったけれど、断る理由もなかったのでやってみることにした。

手入れを始めた10月の暮れ。ビオトープに花は咲いておらず、植物は冬に向かって葉を落としているところだった。まず取りかかったのはクルミの木の剪定だ。無造作に伸びた枝のなかから育ちのよい枝だけを残す。栄養が分散するのを防ぎ、まわりの植物への日当たりもよくするためだ。

さつそく剪定を始めるが、のこぎりを持つのは中学校の技術科の授業ぶりだ。刃がぐにやりと曲がったり、抜けなくなったりと手元がおぼつかない。「疲れた」「刃が進まない」などと言いながら、1本を10分以上かけてなんとか切り終えた。剪定した枝はさらに50センチほどに切り、幹の根元に積み上げていく。こうすると積まれた枝のあいだが昆虫の住処になるそうだ。

見方が変わった春

始めてから少し経つと庭いじりの新鮮さは薄れ、楽しみは植物を眺めることへと変わっていった。5月にもなれば、訪れるたびに新しいつぼみができたり、花が咲いたりするので、それを探すのにワクワクしていたのだ。

一番のお気に入りにはホオノキ（左写真真一参照）。この木の花は、手の平いっぱいに乗るくらい一輪が大きく、香りは果実のように甘いらしい。らしいというのは、ビオトープに

右 ビオトープの小道
（2015.10.27）
左 ヒャクニチソウの
種を採取する友人
（2015.11.24）



植えてからは数年しか経っていないので、まだ花に触れたことがないからだ。一度だけ私はうら山で花を目にしたことがあったが、そのときは茂る植物の隙間から花らしきものが遠くに見えたという程度だったので、もっと近くで見たいと思っていた。ビオトープのホオノキは卒業までにぎりぎり花をつけるかどうか、と言われている。本当に大きな花になるのか、香りがするのか。自分の手に乗せて

確かめられるのを楽しみにしていた。

こうして植物を見てみると、自分で魅力や変化に気づけたことに嬉しくなると、名前や特徴を調べるようになっていた。すると違いを実感して、それまで「植物」としか思えなかったビオトープの木々が「クルミ」「エゴノキ」と鮮明に浮かび上がって見えた。1年生のころは名前なんてひとつも知らなかったのに、今では草花の豆知識を自慢げに披露したがる私がいる。

3年目、最後の夏

以前は疲れて仕方がなかった剪定にも慣れ、太い枝も数分で切り倒せるようになって

た。剪定のおかげか、去年の秋はクルミの実がたくさんなった気がした。本当にたくさん実がついたのか、それとも前より私の目が肥えて、よく見つけられるようになったのかはわからない。でも、どちらにしても嬉しかった。

けれど、ビオトープは今年でなくなってしまう。ここに新しい校舎が建つのだそう。そのため、いくつかの木は移植することになっている。ホオノキもグラウンドへと移植されたが、すでに葉が小さく、幹は腐っているように見えた。もうきつと花をつけることはないだろう。

たつたひとつの植物で嬉しくなったり、悲しくなったり、心ゆさぶられる。どんなものでもおもしろく見えた、子どものころの心を取り戻したかのような感覚。ビオトープはなくなってしまうても、この気持ちさえあれば、どんなところでもまた心を動かせる。なんでもない生活のなかで「いいな」と思えるものが増えたのは、本当に幸せなことだ。

※多様な生きものが訪れるよう整備された環境のこと。本学では2003年から活動が始まった。

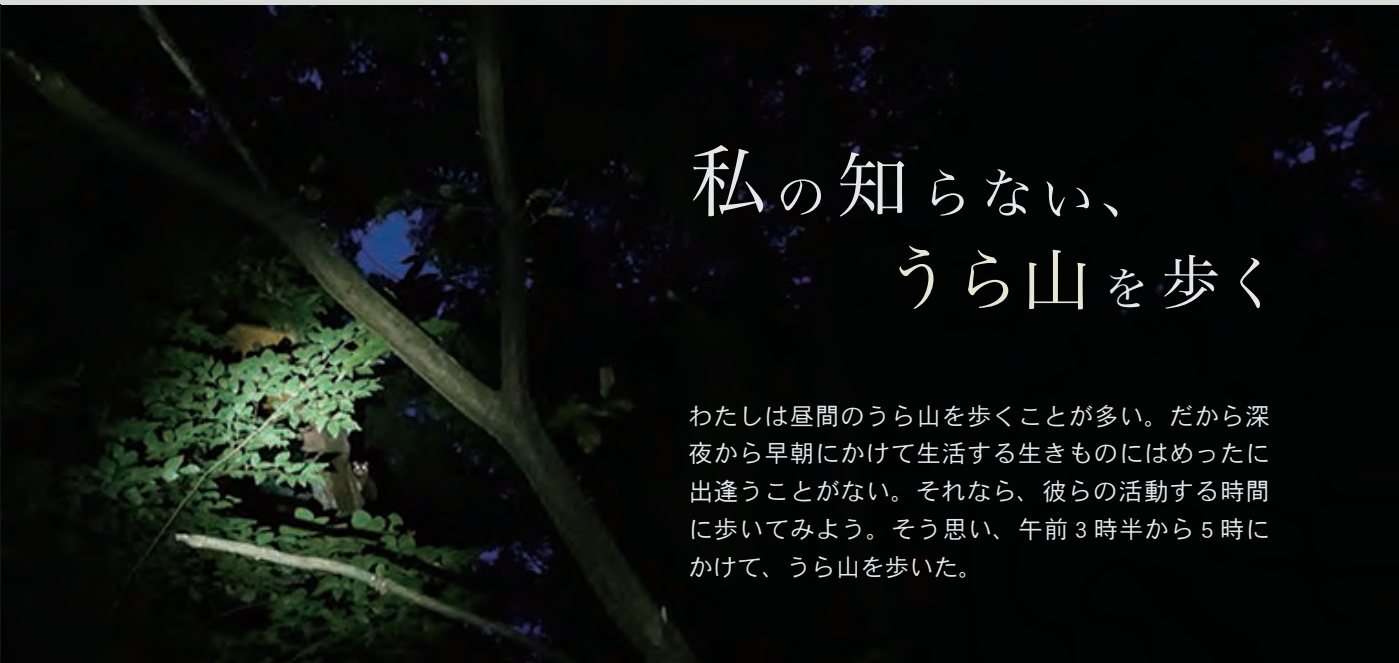
伊藤瑠依（社会学科4年）＝文・写真



4 アーモンドの花。ふだん食べているあのアーモンドと聞いて、意外にかわいらしい姿に衝撃を受けた
（2014.04.15）



1 ホオノキ。高さ20～30mにもなる高木で葉は約30cmほどの大きさになる
（2014.05.12）
2 ハナイカダ。葉の上に花を咲かせ実をつける珍しい植物だ（2015.05.29）



左：午前4時、空は明るい　中央上：朝露がついたタケニグサ　中央下：動物が土を掘った跡があった　右：ムササビの親子

私の知らない、 うら山を歩く

わたしは昼間のうら山を歩くことが多い。だから深夜から早朝にかけて生活する生きものにはめったに出逢うことがない。それなら、彼らの活動する時間に歩いてみよう。そう思い、午前3時半から5時にかけて、うら山を歩いた。

歩いたのは6月20日、27日、7月12日の3回。うら山の入口からゆっくり歩いて20分ほどのところに、大桑小屋^{おおくわ}という小さな観察小屋が建っている。そこまで歩くのが、わたしの山歩きコースだ。

暗闇のなかで

まだ暗いうら山に入る。落ち葉が積もる地面に足を踏み入れると、少し足が沈み込む。山中は進むほどに生いしげる木々でさらに暗くなり、ライトがなければあたりは見えない。そのぶん、聴覚や嗅覚が研ぎすまされ、音や匂いなどに敏感になってくる。

10分ほど歩くと、高く伸びたスギの木の間だから、谷のむこう側の斜面が見える。6月20日、その斜面の中腹あたりで、なにかがさつと草を踏む音を聞いた。音の先にいたのはニホンジカだ。うら山にいるとは聞いていたけれど、じつさいに出逢うのははじめてだった。細い足でしなやかに斜面を駆け上がる。暗闇に浮かび上がった、だいたい色の毛並みが鮮やかだ。わたしが鳴らしていた熊鈴の音に驚いたのだろう。山の奥に走っていった。

奥に進んだ山道のわきには、山に不似合いな鉄塔が立っている。その場所で足が止まった。いきなりあたり一帯に、ツンとくる獣の匂いがしたのだ。体を地面や木に擦りつけたのだろうか。尿をしたのだろうか。わたしが来る直前まで、その場に動物がいたであろう生々しい気配が残っていた。

地面をよく見ると、山の斜面や道の途中に、足跡や地面を掘った跡があった。地面に落ちた枯れ葉は、薄暗いなかでは白っぽく見える。そこに動物に掘り返された部分がくつきりと黒く浮き出て見え、生きものの跡が昼間よりも見つけやすい。まだ土は湿っている。「自分がこの場所に来る少し前に動物が同じ場所をとおっていたんだ」と思うと、出逢いたかったという自分と、出逢わなくてよかったとほっとする自分がいた。

ムササビの帰宅

ムササビに出逢ったのは3回目に登った7月12日。大桑小屋の周辺に掛けてある巣箱を観察していると、ばさつとなにかが飛んで、生いしげる葉にあたる音がした。さらに一頭

の黒い影が同じ木に飛んできた。影が向かったほうへライトを照らすと、目がキラリと光る。ムササビだ。二頭と目が合った。一頭は木の幹につかまり、もう一頭は巣箱の入口から顔を出している。さらに、もう一頭が木の裏から顔をのぞかせた。はじめに滑空してきた一頭は大きく、あとの二頭は小さい。きつと親子だろう。三頭が巣箱に入ったのち、母親であろうムササビが巣箱から静かに見つめてきた。1分、2分と目が合っている母ムササビはこちらを見たままだ。大きな黒目をそ

らさず、わたしを見つめる姿からは、子連れで山で生きる力強さを感じた。

夜から朝へ、変わる時

歩いていると、空気や生きものの鳴き声から、山のように大きく変化することを感じる。

午前3時50分のうら山はまだ夜だ。鳥も虫も鳴いていない。まわりの音はなにも聞こえないくらい静かだ。

ようすが変わりはじめたのは午前4時5分すぎ。はじめは鳥が鳴き出す。まわりはしんとしているから、鳴き声のはつきりと聞こえ

る。次に鳴き出したのはヒグラシだ。数匹が鳴きはじめ、5分もすればうるさいほどたくさんさんの声が響き合う。空気も変わる。光をあびた朝露が蒸発して湿度が上がり、しっとりとした空気が肌にはりつく。むわつとした土や草木や獣の匂いもする。深呼吸をしたら、うら山を体いっぱいにとり込んだ気分になった。

感じて、見つける

暗く、あたりのようすがわからないと、見えない恐怖を感じる。そのためか、目で見ると以上に耳や鼻、肌で感じることが多くあった。シカやムササビを見つけたのは音がきつかけだし、山の変化も肌や鼻で感じた発見だ。今回の山歩きで、「目で見つけることだけが発見ではない」ということに気がついた。全身の感覚をつかって観察すると、いろいろな神経をつかうから、ぴりつと電流が走るような緊張感がある。けれどそのぶん、ようすや発見が、実感として体に伝わってきた。

夜明けのうら山には、五感で発見をする楽しみがあった。



九鬼山頂からは山梨県北東部に広がる、大菩薩嶺(2059m)を中心とした大菩薩山系が見られる(2016.5.21)

頂上へと続く尾根を右手に進むとすぐ富士見台に着く。文字通り富士山を正面に望める開けた場所だ。ふだん街中で見られる富士山は、手前にある山のせいで一部が欠けたように見えることが多い。形がはつきりした富士山を目にして、知らないうちに残雪が少なくなっていたのに気づいた。

富士見台を後にして、3分ほどで頂上に着いた。まず、そこからの眺めにひたる。富士見台とは違い、180度見渡せるので、視界に枝などの障害物が少ない。近くの山々はもちろん、直線距離で30 km以上離れた県境のほうの山々まで見渡せた。次はあの山に行きたいとか、あそここの山は行ったことあるなというようなことを思うと、わくわくした。

次に街のほうを見下ろす。ここからだ

と、気分の良いを保ったまま急坂を登りきれた。急坂を登りきると頂上はもうすぐだ。推定2 m以上の大きさがある巨岩の横を通り過ぎ、滑落を防ぐためのロープが張ってある最後の登り坂にきた。そこを超え、頂上へと続く尾根に出ることができた。

富士見台・山頂に到着

頂上へと続く尾根を右手に進むとすぐ富士見台に着く。文字通り富士山を正面に望める開けた場所だ。ふだん街中で見られる富士山は、手前にある山のせいで一部が欠けたように見えることが多い。形がはつきりした富士山を目にして、知らないうちに残雪が少なくなっていたのに気づいた。

富士見台を後にして、3分ほどで頂上に着いた。まず、そこからの眺めにひたる。富士見台とは違い、180度見渡せるので、視界に枝などの障害物が少ない。近くの山々はもちろん、直線距離で30 km以上離れた県境のほうの山々まで見渡せた。次はあの山に行きたいとか、あそここの山は行ったことあるなというようなことを思うと、わくわくした。

次に街のほうを見下ろす。ここからだ

連載

都留の山々を歩く

第1回 九鬼山



都留の山々に登り、山頂や登山道の景色を楽しみたい。そう思ったことが都留の山に登ろうと思ったきっかけであった。この連載を通して、私なりの山の楽しみかたをお伝えしたい。第1回目は、都留市と大月市にまたがる九鬼山に登った。

小泉篤広(社会学科1年)=文・写真

九鬼山は標高970 mの低山だ。山の下にはリニア実験線のトンネルが通っている。登山コースは4つあり、今回は愛宕神社コースを通じて頂上に登った。

九鬼山には高校の部活動で何度か登ったことがあった。しかし、そのときは登山道の植物に目を向けたり、山頂からの眺めを楽しんだりする時間的な余裕があまりなかった。九鬼山を歩きなおそう。そう思い、今回は九鬼山に登ることにした。



九鬼山周辺地図(矢印は通った順路を示す)

登山道のように

神社の横から登山道ははじまる。愛宕神社コースは道幅が50 cmほどと狭く、登りはじめから石がいたるところに転がっている。大きい石だと20 cmくらいはある。登りにくいし、足をひねってしまいそうだ。足の置き場を選びながら30分ほど歩いていく。

頭上が少し開けた場所を過ぎ、そこから10分ほど歩を進めると分岐点に着いた。ここを左に行くと田野倉地区、右に行くと頂上だ。右に曲がり、尾根(※)伝いの道を進む。分岐から歩いて5分ほどすると、斜度45度はあろうかというような急坂が登場する。毎回九鬼山に来るたび、「ここを登るのか」と一瞬引き返したくなるような気持ちになつてしまう。しかし、頂上からの眺めを見るためには頑張るしかない、と自分に言い聞かせて急坂を登っていく。

急坂はくねくねとした、つづら折りの道になっている。その坂の途中でホオノキを見つけた。私は今まで枯れ葉でしかホオノキの葉を見たことがなかった。大きく青々としたホオノキの葉を見つけられてうれしかったの

※尾根：山の頂上と頂上を結んで続いている、一番高い部分のつらなり



シモツケと、その上にいた小さなイモムシ。まるでくつろいでいるように見えた (2016.06.06)



小さい世界

高橋光 (比較文化学科1年) = 文・写真

パッと、目に入った花があった。本学附属図書館の脇にあるビオトープの散策中、その花を見つけた。桜よりも濃いめのピンクで、小さい五弁の花が集まって咲いていて、少しアジサイに似ている。とても可愛らしい花だ。散策に同行してくれた先輩にその花の名前を聞くと、おそらくシモツケという植物だと言う。案外可愛らしくないその名前に、どうしてシモツケなのだろうと思った。そのとき、ある特徴に気がついた。ある特徴というのが、その花の雌しべにある。細かい雄しべがご飯に乗つける桜でんぶのように、ふわふわと密集している。それを遠目で見ると、植物に霜が降りたときの様子に似ているのだ。季節が秋から冬に変わりそうなころの早朝、庭に生えている植物に、霜が降りていたことを思い出した。なるほど。だからシモツケなんだ、と私は自分のなかで勝手に納得し、カメラを近づけて写真を撮ることにした。すると、遠目ではわからなかったが、小さな半透明のイモムシが花の上にいる。カメラの1cmフォーカスで覗くと一気に臨場感が増し、私は小さい生きものたちだけの世界を覗いたような気持ちになった。そこは映画「フライングダンサー」

「自然の魅力を語ってください」と言われて、語ることができるほど、私は自然と関わってこなかった。そこで私は、先輩がたにキャンパス内を案内していただくことにした。キャンパス内を歩いていくなかで、ひとときわ私を自然の世界へ誘惑してきたのは、背の低いハナйкаダという木だった。なぜハナйкаダに興味を持ったのかというと、葉の真ん中に実がついていたからである。これまで私は、実は葉と別々になるものだと思いに込めていたのだ。まさか実と葉と一緒にできる植物があるとは知らず、私のなかでは天と地とがひっくり返るほどの衝撃だった。とても興味を持った私は、4月18日に一人でもう一度ハナйкаダを観に行つた。じっくり観察すればするほどおもしろかった。まず、鮮やかな黄緑色の葉に、くつきりとした葉脈が流れていること。葉がそれぞれの区画に分かれていて、一つひとつがぶつくりとした唇のように見えた。葉の中心には、多いときで4つの実がついていた。実はつぼみのような形をしていて、上半分が紫色をしていた。ま



葉のふちに小さなとげがある。触てみるとふわふわしていた (2016.04.18)

はじめての観察

た、どんなに小さい葉の上でも、必ず一つは実がちよこんとできていた。あとから調べて分かったことだが、私が実だと思っていたものは、どうやらつぼみだったらしい。これから葉の上で花を咲かせ、そのあと実になるようだ。また、ハナйкаダの名前の由来も、とてもおもしろい。葉をイカダに見立て、花が乗っているように見えることからこの名がついたのだ。私なら、上半分が紫色のつぼみを坊主頭に見立てて、「ボウズイカダ」と名づけてみたい。最初は興味がなかった自然。それが、一種の低木に魅せられたおかげで一気に引き込まれたのだ。今回ハナйкаダを観察したように、自分から距離を詰めることで、図鑑では知ることのできない魅力を発見できる。この観察を通して、直接自分の目で見ないと分からないおもしろさがあることに気づけたのは、大きな収穫だった。おのずと語りかけてくれるのだと気づくことができた。

平岡摩梨菜 (社会学科1年) = 文・写真



春のうら山探検。シジウカラの巣箱をそっとのぞく

※木の内部が腐り空洞になった穴

さん教えてくれる子がいた。その子はこれまでムササビを見たことはないという。じつさいに滑空するところを見たらどんなふうに見えるのだろう、とわたしはワクワクしていた。

ムササビは木から木へ滑空して食べものを探す。その前に巣穴である木の洞（※）から何度か顔を出したり引つ込めたりして周りのようす

生きる姿 に出会うとき

木から木へ滑空するムササビ。目の前でヒマワリの種をほおばる野ネズミ。川には小さな水生昆虫たち。生きものはわたしたちのすぐそばで暮らしている。「うら山観察会」は、生きものとの出会いをつくる団体だ。



をうかがう。観察していた洞には二匹のムササビがいた。その日は子どもが多く、ムササビたちは警戒していたのか二匹一緒に顔をのぞかせたり、交互にこちらを見たりして、出るタイミングをうかがっているようだった。

それを見ていた彼が、ふと真剣な顔でこちらを見ながら一言。「ムササビは臆病なんだと思う」。なぜそう思ったのか聞いてみると、「だって何度も顔を引つ込めちゃうし、たぶん寂しがり屋なんだよ」という答えが返ってきた。

わたしは、その表現のしかたに驚いた。同じムササビを見ていても、わたしが「警戒して出てこないのだろうな」と思ったことを、その子は二匹一緒に洞のなかにいるのを見て、「寂しがり屋」だと思ったのだ。きつと、目に映ったムササビのようすから、その子なりに考えて出てきた言葉なのだろう。

その後、観察しているわたしたちの上で、ムササビが大滑空を見せてくれた。そのとき、彼は目を大きく見開いて、口を半開きにして、ムササビがとおっていった空をぼうっと見上げていた。飛んだね、と声を掛けても、こちらを見ずにうなずくだけだ。その表情やようすを見れば、感想なんて聞かなくても十分だった。観察していて考えたことがそのままぼつと出てきたような言葉や、生きものに会えたときの嬉しくてしょうがないという表情が、わたしはたまらなく素敵だと思う。

サワガニ捕りのプロ

7月には戸沢川で川の観察会をおこなった。水質がきれいでも、たくさんの生きものに会えることができるこの川は、かつこうの観察場所だ。子どもたちは夢中になってスタッフと一緒に生きものを探していた。

わたしは「うら山観察会」にスタッフとして参加している。都留の自然を子どもたちに知ってほしい。身近な生きものと仲良くなるきっかけをつくりたい。その思いを大切にして、子どもを対象とした自然観察会をおこなっている。ムササビ観察、春のうら山探検、夜の森に入るナイトハイクなど、観察会は一年間で八種類だ。そのどれにも、スタッフの熱意と工夫が詰め込まれている。

ムササビは寂しがり屋？

毎年4月におこなわれるのがムササビ観察会と春のうら山探検だ。ムササビ観察会は鹿留にある今宮神社でおこなわれる。ムササビの滑空するようすをじつさいに観察できるとあって、毎年参加者が多い人気の観察会だ。今年来てくれた男の子の一人に、自分の好きな生きものの知識をスタッフにたく

なかでもサワガニは子どもたちの人気者だ。「川岸の石の下を探すといい」。これは、サワガニを見つけたのが得意な男の子が発見したことだ。この子は、ほかの子どもやスタッフにも捕りかたを教えてくれる。でもその子はもともと上手だったので、はない。初めの一匹を捕まえてから、



ムササビ観察会のようす。左：望遠鏡を使うと、洞から顔を出したムササビがよく見える。右：ムササビが住む大木の大きさを実感。「3人でも手が届かない！」



自分で見つける博物館



①秘密道具の顕微鏡。小さな生きものたちが大きくはっきりと見える②「なんかいた！」スタッフと種類を確認③岩の隙間のサワガニを探す④捕まえた生きものを水槽に入れて観察⑤子どもが捕まえたサワガニ⑥観察した後は、お待ちかねの川遊び

コツをつかんだのだ。

サワガニの見つけかたは、図鑑に載っているかもしれない。でも自分で「ここにいそう」と考えて、サワガニを捕まえられたときの嬉しさはなにも代えられないと思う。自分で考えて捕まえたという経験はきつと忘れずに、その子のなかに残り続けるだろう。

一人ひとり好きなものがある

子どもたちをじつさいにうら山や川に連れて行って観察会をしてみると、それぞれ自分の好きなものを探しに行く。同じものを見ていても目をつけるところ、おもしろいと思うところはちがっていた。

たとえば川の観察会では、サワガニを捕まえることがおもしろいという子がいた。そのいっぽうで、ちがうところに目がいく子もいたのだ。その子は捕まえた何匹かのサワガニのハサミをじつと見つめていた。

なにを見ているのだろうと、不思議に思ってた私もまねして顔を近づけてみると、一匹一匹ハサミの大きさと色が微妙にちがうことに気づいた。子どもたちは、自然のなかで目に飛び込んできくいろいろなものの中から、自分のお気に入りを見つけてるのが上手だ。

◇ ◇ ◇

観察会での子どもたちのようすを見て

いると、生きものがじつさいに生きている姿を見たときの感動の大きさは、ただ写真を見たときとは比べものにならないのだと感ずる。じつさいに見ることで、自分だけの発見ができたり、今まで気づけなかったおもしろさに気づくことができた。子どもたちは、いつも



川の観察会に来てくれた子どもたちと記念撮影

そのことを観察しているときの表情や言葉から教えてくれる。そして、近くで見ているわたしにも、その子が見つけた生きもののおもしろさや魅力を分けてもらえるような気がするのだ。

長尾泉（初等教育学科3年） 文・写真

私たちは2号続けて、身近にある自然にいつもより一歩近づいてきました。すると、その場に行き自分の目で見たからこそできる発見がありました。

耳をすませば、まちなかでも鳥の鳴き声が聞こえ、山に入れば草木や獣のにおいがします。自分の目や耳、鼻など五感を使って楽しみながら観察することができました。近くの山に登ってみると、眺めの壮さに驚かされます。その場で見ることで、実物の大きさを実感できました。

ひとつ発見をすると、「もっと知りたい」という気持ちが湧いてきて、新たな疑問が浮かびます。そんなときは、もう一度その場に行き観察しました。

何度もかようにうちに疑問を解決できたり、愛着が湧いてきたり。そのたびに、身近な自然への興味が広がりました。

今まで何気なくとおっていた道にも、何か発見があるかもしれない。そんな気持ちで歩くと、日々の生活が少し楽しくなります。

フィールド暦

気温がどんどん上がってきて、いよいよ夏は本番です。6月から7月のあいだに都留で見つけた生きものを紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



カワウ

2016.07.18 小形山
何かを探すように泳ぐカワウ。10秒ごとに息継ぎをしていました。



アオサギ

2016.07.18 小形山
全長1mはある大きな鳥です。川岸で水中をじっと見ていました。



ツバメ

2016.07.18 古川渡
お腹の羽がふわふわしていることから、今年巣立った個体だと思われます。



オオムラサキ

2016.06.20 本学4号館前
青紫色の翅が綺麗です。バサッと音がするくらい力強く羽ばたきます。



オオミスジ

2016.07.02 楽山公園
地面の水分を吸っているようでした。翅を広げると6cmくらいになります。



スミナガシ

2016.07.24 本学4号館前
黒い体と白い模様が目印。幼虫はアワブキという木の葉を食べます。

知ればわかる、 畳の「よさ」

実家の畳で、昼すぎから夜まで眠ってしまったことがある。ほどよい固さの手触り、優しいうす緑色、独特のにおい。畳には、私をぐっすり寝かせてくれる不思議な力があるみたいだ。ところが今自分が住むアパートはフローリングで、身の回りに畳はない。あんなに落ち着ける空間をつくり出す畳が、近ごろあまり見られなくなっているのはなぜだろう。

窪田りさ(社会学科2年)=文・写真



ネジバナ

2016.06.24 本学4号館前
まっすぐ上を向いた茎から、らせん状に花が咲いています。



ギンリョウソウ

2016.06.27 本学うら山
薄暗い森に生えていました。色が青白くて、オバケのように見えました。



イワタバコ

2016.07.01 十日市場
湿った崖に生える植物です。葉を食べたり胃薬にしたりできます。

7月17日、都留市内にある中沢畳店を訪れた。このお店は畳以外にも障子や襖をつくっている。昔は笛吹き市にお店があったが、今は都留市駅近くにお店がある。

このお店の店主は中沢享道さん（44）で、7代目か8代目だそう。「もう古すぎて定かじゃないんだけど」と中沢さんは笑った。畳のお話をするとき、中沢さんの目は輝き、声はずむ。そして、次から次へと畳の知識が飛び出してくる。そんなようすから、中沢さんが長いあいだ畳と向き合ってきたことが分かった。

● 畳の不思議

畳屋さんの仕事は、「畳表」、「畳縁」、「畳床」をそれぞれ仕入れ、縫い合わせて畳をつくること。畳表はい草からできた畳の表面の部分。畳縁はふちの模様のある部分。畳床は藁からできた土台となる部分だ。

中沢畳店に入ったとき、どこか懐かしい畳のにおいがぶわつと広がった。香水のような甘い香りがするわけでも、おいしそうな食べ物のおにおいがするわけでもないのに、なぜか惹かれる。やつぱり私は、このにおいが好き

もとの家へと戻っていく。

「この畳にはどんな思い出があるのかな」と想像して、私は何だか持ち主をうらやましく思った。一つのを長く使っていると、思い出ができたり、愛着が生まれたりする。この畳の持ち主は半世紀も、自分の生活の一部を畳にあずけていたのだ。いつぼう畳は、その役割を立派に果たしていた。少し古くなっただけで新しいものを買ってしまう私とは大違いだ。新品のものではなく、古いものに価値を感じた瞬間だった。



畳床のへこんでいる部分に藁を足し、縫いつけているようす



見慣れない柄の畳縁。このほかにもたくさんの柄がある

なのだ。畳のにおいを表現するのに、ちょうどよい言葉が見つからない。「香ばしい」というのが一番近いかなと思ったけれど、少し違うような気もした。

「俺もう畳のにおい分かんないです。ガキのころからずつと嗅いでるから」。中沢さんにとつて、このにおいは空気みたいなものなのかもしれない。畳のにおいを感じなくなるということは、何年も、何十年も畳と付き合い続けた職人さんの証なのだろう。

原材料のい草がこのにおいのもととなつているのかと思つてうかがうと、違うというの

● 失われゆく畳

近年は畳よりもフローリングの家が目立つ。洋風の建築が好まれていることや、畳を修繕するのに費用がかかることが背景にあるのだろう。畳を好んで使ってくれていたお客さんが、高齢で亡くなることも多いそうだ。常連さんはどんどん減つてしまつている。畳を使う人が減つていることや、その魅力を分かつてもらえないことを話す中沢さんは、やるせないような、悲しい表情をする。

時代に合わせて変化しなければ、伝統は衰退してしまう。たとえ畳の形は変わっても、伝統として残つてほしいというのが中沢さんの願いだ。そんな中沢さんの気持ちが通じたのか、最近洋間にも合わせやすい、カラーの「和紙畳」が出てきた。これは手触りが少し固めで、においもしない。中沢さんは試しにご自宅で和紙畳を使つてみたそうだ。けれど、本物の畳にはおよばなかったという。「やつぱ和紙だと、偽物じゃないですか。だからいまいち癒しがないんで、ごろんてしてもあんまり気持ちよくないんです」。それでも、「若者に興味をもってもらえるから、こ

とても驚いた。中沢さんによると、刈つた後のい草を泥水につけることで、独特のにおいがあるという。泥とい草の成分が混じると化学変化が起きるそうだ。畳にこんな不思議が隠されていたなんて、思つてもみないことだった。

● 畳が教えてくれること

中沢さんは24年間畳をつくり続けています。私の背丈以上もある畳をひよいと持ち上げ、作業台にのせる。畳を縫うのも、縫つた後のチェックも素早く、流れるように畳ができあがつていく。そんなようすに、私の目は釘づけになった。

畳屋さんは畳の修繕もおこなう。じつさいに50年間使い込まれた畳を直す作業を見せていただいた。「こんな藁のかたまりが50年ももつんだもんな」と言いながら中沢さんが畳表をはがすと、へこんでいるところとでつぱつしているところがあった。へこんでいる部分には藁を足し、でつぱつしている部分は藁を削り取つて平らにしていく。古くなつた畳表と畳縁は取り替えるが、畳床は直してそのまま使うのだ。このように修繕され、畳は再び



中沢さん宅の和紙畳。色・手触りがふつうの畳と違うため、ひと目見ただけでは畳だと分からない

ういうのが出てきて少しよかった」と中沢さんはおっしゃった。

これまで私は単に畳が好きだけで、畳が失われていることに無関心だった。ところが今の私は違う。畳の「よさ」をさらにたくさん知り、自分の好きな畳をほかの人にも知ってもらいたい、伝えたいとまで思うようになった。畳以外の消えつつある伝統にも、きつと私の知らない「よさ」がたくさんあるのだろう。まず、「よさ」を知ること。それが伝統を残す第一歩となる。大切なことを畳から教わった。

- ①お店の中央に並んでいたガラスのグラス
 ②アフリカの民芸品。彫刻の跡が残る姿が、なんとたまにいい
 ③お店の入り口にも民芸品が置かれている



①



③



②

だ。そのときは「気持ちさがぼつていた」と話す。そういう自分に気づいたのは、悩みや迷いというのが正直にお店に現れていると感じたからだ。「お店のディスプレイやお客さんへの対応に力加減がでてしまっていると思うとすごく怖かった」と、当時を振り返る。

お客さんのいらつしやらない時間にはなにをしているのだろう。尋ねてみると、掃除をしたりディスプレイを変えたりしているそうだ。高校生のころ、美術部だったという市川さんは、ディスプレイを考えると、絵を描



工芸たけだを訪ねて

都留に初めて来たときから気になっていた「工芸たけだ」。都留に住むようになってからは、何度か通うようになった。私は手にとって民芸品と向き合う時間が好きだ。手に取らないとわからない小さなちがいをを見つけられるからだ。もっとくわしくお店について知りたいと思い、二代目店主の市川容子さん(61)にお話をうかがった。

会計場の前に座る市川さん。ここからはお店全体を見渡することができる

本学から都留トンネルに向かって10分ほど歩いたところに「工芸たけだ」はある。今年、開店して30年を迎える。6月1日のお昼近く、いつものように扉を開けると、二代目店主の市川さんが「いらつしやい」と迎えてくれた。お店では昔から変わることなく、民芸品を販売してきた。民芸品とは、生活のなかから生まれた、実用的な工芸品のこと。初代の店主たけださんは民芸好きなかたで、夫の転勤を機に都留市へ引っ越してきた。お店を構えたのは、このまちで友達ができるようにと考えたからだという。

畑を耕すように

現在の店主、市川さんは出産を機に何かはじめたいと思っていたところ、お姉さんの紹介で工芸たけだを知ったそう。それからアルバイトとして週に2回、お店に立つようになった。そして、たけださんがお店を引退されるとき、次の店主をまかされたという。「嫌だと思った。パートでいるほうが気楽だから。だけどうちの夫に言われたの。たまには頑張ればいいじゃないってね。それで、はじめることにしたの」と市川さんはおつしやる。

いているように感じることもあるそう。色や形、素材などの組み合わせによってお店の雰囲気が変わるからだ。テーマをもつてお店全体を変えていきたいとおつしやる。会計場の前から少し後ろにさがつてお店全体を見渡す市川さんは、まるでキャンバスに向き合う画家のようにみえる。その日、お店の中央のスペースには、すずしげな色合いの器が並んでいた。テーマは「初夏」といったところだろうか。

「なんでも好きっていうのがはじまりだった」という市川さんは、内装を考える時間をなによりも楽しんでいるようにみえた。

民芸品の魅力

民芸品は特別なものではない、あたりまえにあるものだとし川さんはおつしやる。そのため、お客さんに「市川さんの家にも民芸品はありますか」と改めて聞かれると、一瞬「あれ？」と考えてしまう。けれどすぐに、家にあるもの全部、民芸品だったと思ひ出すそうだ。それくらい生活のなかに民芸品は溶け込んでいるのだろう。

そんな市川さんにとって、民芸品の魅力は



扉を開くと最初に目についた民芸品たち

今日まで仕事が好きだと感じたことはないのだろうか。うかがってみると、すぐに答えが返ってきた。「全然ない。結構どこでもなじんじやうのね。行き当たりばつたりの人生だったけれど、そこで自分なりに頑張ればいいと思う」。無理をすると途中で疲れてしまうから、高ぶらないでいつも平常心でいることを心掛けているそう。そんなご自身のことを「畑を耕すみたいに(過ごしている)」と語る市川さんの飾らない姿が、いいなと思った。

市川さんは一度だけ、仕事はしているけれど気が入っていないということがあったそう

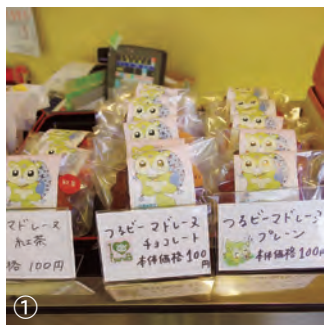
あたたかさだ。人の手のぬくもりが残っているわけではないけれど、伝わってくるような気がするそう。

お店に置いてある民芸品もすべて市川さんが選んできたもの。そのつど、つくり手のもとを訪ねて、一点一点自分の目で確かめる。そして、気に入ったものを商品として仕入れていくそう。民芸品を通して、たくさんの人とつながれることは、お店を続ける力になっているとおつしやる。

もうすぐお昼のチャイムがならうとしているとき、市川さんが私たちにお茶をいれてくれた。よく見ると器がそれぞれ違う。ひとりひとりのイメージにあった器を用意したという。1時間ほどお話ししているあいだにその人らしい器を選んでみせてくださった。私はそんな、なにげないおもてなしに驚いた。

市川さんは、自分の「好き」という気持ちと素直に寄りそい、商品の仕入れからお店づくりまでを手掛けている。なにかに抑えられることなくお店を営み続ける姿は、まるで野花のように生きいきとしていた。

江利そらむ(社会学科1年)＝文・写真
 小泉篤広(社会学科1年)＝写真
 伊藤瑠依(社会学科4年)＝写真



①包装紙に大きくつるビーが印刷された「つるビーマドレーヌ」
②見せていただいた写真。中央に立っているのが初代店主
③丁寧に菓子の説明をしてくださる英樹さん
④店内の様子。黄色い壁から温かみを感じる

ならやのお菓子に 込められたもの

ならやのお菓子は、店主である奈良英樹さん（48）が作り上げている。英樹さんは高校を卒業後、東京で7年間修行をし、25歳のとき都留へ戻った。26歳でお店を継ぎ、今年で24年目となる。

都留のお菓子

焼き立てのお菓子の香りが広がる店内。左右をお菓子に囲まれ、つい目移りしてしまう。そのなかでも私が気になったのは、名前に都留とつくお菓子だった。「つるっ娘餅」、「都留の響」^{ひびき}、「つるビーマドレーヌ」。なかでも「つるビーマドレーヌ」は、「せつかく都留市には、つるビーというマスコットキャラクターがいるのだから、もつと商品を出していくべきだ」と、英樹さんが直接市役所に掛け合って作ったものだ。すぐに実現とはいかなかったが、2、3年後、ついに形となった。こうして都留市で第4番目のつるビー商品に

なったのだ。「ほんとは1番目になりたかったんだけどね」と英樹さんはおっしゃる。名前に都留とつくお菓子は、地元の人がお土産として持つていけるように。そんな思いも込められているという。

お菓子作りへのこだわり

英樹さんに、お菓子を作るときのコダわりをうかがった。まず、保存料をいっさい使わないこと。保存料を使えば日持ちはするが、体には良くない。保存料を使わないぶん、日持ちを良くするような工夫をしているそう。ならやでは焼きドーナツを販売しているが、ここにも工夫がある。油で揚げると酸化してしまうため、日持ちしにくいのだという。ならやのお菓子はおいしいだけでなく、体にもやさしい。

そして、お菓子の素材には良いものを使うこと。北海道産の小豆など、さまざまな地域

が残っていないという。たった1枚の写真も、古くなって写真立てに貼りついてしまい、とることはできない。

店名のように、写真のころと変わったことは多くある。昔は商店に卸すため、バイクを走らせてお菓子を配達していたそう。販売方法だけでなく、お菓子そのものも変わる。お菓子にもやはり、流行というものがあるらしい。だから英樹さんはいつもアンテナを張っている。昔は月に1回は必ずほかのお菓子屋さんへ行き、お菓子や売りがたなど、多くのことを学んでいたという。忙しくなった今でも、年に数回は出かけるようにしている。「ネットで調べることもできるんだけど、やっぱり自分の目で。行ってみて感じとる」と英樹さんはおっしゃる。店内に並ぶたくさんのお菓子は、英樹さんの努力の結晶だ。

変化するものがあるいつぶうで、変わらないものもある。「酒まんじゅう」もその一つ。なかにつぶあんが入った、白いおまんじゅうだ。麴^{こうじ}が使われるため、名前に酒がつく。「酒まんじゅう」はお米があまりとれなかった時代に、主食として食べられていたものが起源だそう。そんな歴史あるお菓子を初代の店主

ならやは都留市中央、富士みち沿いにあるお菓子屋さん。店内には和洋さまざまなお菓子が並ぶ。そのなかには目新しいものや、なんだか懐かしさを感じるものがあつた。ならやのお菓子に興味を持った私は、お話をうかがうことにした。

から取り寄せたものが使われる。それにもかかわらず、お店に並ぶお菓子は手取りやすい価格だ。たとえば、ならやでは130円でプリンが売られている。英樹さんによると、同じようなプリンが東京では230円で売られていたそう。そんなにも差があるのかと、私は価格設定の低さに驚いた。

ならやには近隣の人だけでなく、東京や神奈川など、県外からもお客さんが訪れるという。これらのこだわりが、お客さんが足を運んでまで食べたいと思う理由なのだろう。

変わるもの、変わらないもの

お話をうかがっているうちに、ならやが歴史あるお店だということを知った。創業はなんと昭和元年。英樹さんで4代目になるという。初代店主のころの写真を見せていただいた。看板には「奈良」の文字が見える。昔は漢字表記だったのだ。昔の写真はこれだけし

が販売しはじめて、今もなおずっと売られている。

どんどん変化する時代に柔軟に対応しながら新しいお菓子を作りだす。それと同時に、長い歴史を持ったお菓子を守り続ける。そんな姿勢が、ならやの魅力の一つなのだ。

ならやのお菓子には、都留への思いやこだわり、歴史など多くのものが詰まっている。これから生まれる新しいお菓子にも、こだわりや思いがたくさん込められるのだろう。英樹さんは、お菓子一つひとつについて、販売までの経緯などを丁寧に説明してくださった。それは、それぞれのお菓子ができるまでにたくさんの苦労や努力があるからなのだと思う。

今回お話をうかがって、ただお菓子を食べただけでは分からないことを知れた。このお菓子には、こんな思いが込められているんだな。そんなことを考えながら食べるお菓子は、なんだか特別にうれしく感じた。

杉浦茜（国文学科1年）＝文・写真
加藤明香（初等教育学科4年）＝写真
平岡摩梨菜（社会学科1年）＝写真

日常から すこし離れて



都留市駅から中央高速道路に向かって10分ほど歩いたところに、木々に囲まれたカフェがある。お店の名前は「カフェナチュラリズム」。マスターである、ヒーコさんこと若林英行さん（48）が11年前に小屋を改修して作ったカフェだ。



注文を受けてからチャイを作り始めるヒーコさん

初めて店内へ入ったときのことをよく覚えていいる。店内を照らすランタンの明かり。5m四方ほどの広すぎない空間。木製のテーブルやイス。カウンター席の向こうに並べられたお酒のボトル。席に座って少しヒーコさんと会話を交わす。お店の居心地の良さを実感した。日常生活から少しぬけだして一息つける。そんなカフェの心地よい雰囲気に着かれて、後日ヒーコさんにお話をうかがった。

川から見つけた場所



ヒーコさんにはカフェを開くなら「いい場所」を選びたいという想いがあった。カフェの場所探しについて、「けつこう町のなかも探したんだけど、なかなかピンとする場所がなくてさ」とおっしゃる。同級生にバスを使ってスポーツバーをやらなかと誘われたこともあった。しかしそれもまたピンと来なかったという。ようやく見つけたのが今のカフェがある場所だった。ここは、人が数年住んで

いなかったせいでまわりが背の高い草で覆われていたという。見つけたときのことを詳しくうかがうと、カフェのすぐ下を流れる桂川を散歩していたときに見つけたそう。道路からではなく、川から見つけたとは想像してなくて驚いた。

7月12日の昼下がりが、じつさいに川をヒーコさんに案内していただいた。この場所を見つけたときと同じ道をたどる。ヒーコさんは当時を思い出しながら「そのときは冬でさ。工事かなんかで偶然、川の水が少なくて、いつもは歩けないところがそのときは行けてさ」と話してくださった。ヒーコさんは足を



大人っぽさを帯びた雰囲気のにめれつつも、店内に入っしまえば少し大人になった気分を味わえる



川から見たカフェナチュラリズム。ヒーコさんの見上げた場所から

止め、「で、こう歩いて来て、なんかあそこ
に家があつて」と川を挟んだ対岸にあるカフェを見上げる。当時のヒーコさんも同じように小屋を見つけたそう。『お！ みたいな
感じで。ピンと来たかも』とおっしゃる。

改めて川からカフェを眺める。木々に囲まれてひっそりとたたずむカフェの姿は、子ども
のころに作った秘密基地を思い出した。

ヒーコさんは「下に降りて川レベルで見ると
気持ちいいよ」とおっしゃる。岸の石の上に

降りて上流を向く。しゃがんで川と同じ目線で風景を眺めてみた。ヒュウと涼しい風が顔にあたる。自然にホッと一息ついてしまう。
「瞑想とかしたことなくても、瞑想しちゃったりね」とヒーコさんが笑いながらおっしゃる。その石の上に乗って川を眺めると本当にそんな気分になるから不思議だ。

ヒーコさんの感覚



ヒーコさんのお話には、はつきりとは言葉に表せない気持ちがたびたび登場した。「いい場所」や「ピンと来た」というものがヒーコさんのなかにあるようだ。ヒーコさんがどんな感覚でものを選んでいるのかを知りたくて「お店の雰囲気壊さないために、こんなことは避けてるとか、しないようにしていることってありますか」と尋ねてみた。するとヒーコさんは「自分の判断基準みたいなものだよね？」とつぶやくと、しばらく悩まれる。どう言葉にしようか悩んでいるように見えた。そして「それは自分のなかにしかないんじゃないかな」とおっしゃった。

ヒーコさんのなかにしかない感覚。わたしはお店の内装や外装を見て、ヒーコさんの言

葉の意味がお店の雰囲気に表れているように感じていた。カフェが木々に囲まれていることや店内のランタンの明かり、大人っぽい雰囲気は、ヒーコさんのなかにある「いい」という感覚のつめあわせなのだと思う。
ヒーコさんは場所を見つけたときに「ピンと来たかも」と表現していた。はつきりとは言葉にできないけれど、心が動かされるとき。そのとき感じる気持ちを大切にされているように思えた。

心が動くとき



わたしはときどき、ものごとを理屈で考えてしまいがちになる。理路整然にしなければと思えば、頭でばかり考えてしまう。するとそのぶん心の動きに気づけなかつたりする。

ふと石の上で気持ちが安らいだり、カフェの心地よさに惹かれたとき、まわりの雰囲気
を体で感じとっていたことに気がつく。理屈でものごとを考えるのは、ひとつのわたしらしさかもしれない。けれど、自分の気持ちやまわりの雰囲気をすなおに感じることも同じぐらい大切にしたいと思う。

佐藤琢磨（社会学科1年）＝文
平岡摩梨菜（社会学科1年）＝写真

ぶれない生きかた

ー有限会社リードを訪ねてー

山梨というと真っ先に思い浮かぶのは富士山や果物だった。だからか、山梨は織物も有名だ、と聞いても最初はピンと来なかった。山梨の織物にはどんなものがあるのだろう。そんな興味から、都留という一番身近な場所での織物産業を営む人にお話をうかがうことにした。

都留の機屋

今回お話をうかがったのは有限会社リードの谷内正義さん（69）。谷内さんは、ご両親のもとで20年、いまの会社で30年と、あわせて50年間織物業に携わっているという。人生の半分以上を織物に捧げているからだ。昭和62年6月に開業し、現在は谷内さんと奥さんである京子さんの2人で経営している。リードでは自社でデザインから制作まで手がけたネクタイを販売している。ネクタイのデザインから機織りまでおこなう制作は谷内さん、販売は奥さんという役割分担になっているそうだ。

取材当日、会社を訪れると奥さんが机に座り、何か作業をしていた。緊張しつつ挨拶をすると、奥さんは柔らかい笑顔で出迎えてくださった。入ってすぐ左側には棚があり、一

つひとつ仕切られた箱のなかにネクタイが飾られている。無地のものやチェック柄、ストライプ柄などいろいろなデザインのネクタイがある。カラフルなネクタイの入った箱たちはまるでキラキラした宝石箱のようだ。奥の部屋には、大きな織機が数台あり、そこでネクタイは織られている。

妥協しない姿勢

いままでに大変なことはあったかがつたところ、会社を始めてから、二度も経営が厳しくなったことがあるという。そのときには夜も寝ずに、徹夜で機織りをし、経営を立て直したそうだ。私だったら、一度経営が厳しくなったら会社をたたむことを考える。一度だけでなく、二度も困難な状況を乗り越えた強さには、織物業を途絶えさせまいとする谷内さんなりの意地があつたのかもしれない。「そのときがあつたからいまの自分がある」と谷内さんは振り返る。一つのことを続けていく難しさは誰よりも谷内さん自身が知っていることだろう。もし自分だったら、こんなにも長いあいだ一つのこと真剣に向き合うことができるだろうか。



谷内さんが制作したネクタイ。このほかに山梨らしい富士山の柄が入ったものもあった

どう生きていきたいか

山梨の織物業は、後継者不足などから厳しい現状にある。そんな現状で、織物業を頑張っている人たちが食べていけるように自分分は動いていかなければならないと谷内さんはおっしゃる。

そういった織物業に対する想いを聞いているうちに、私は谷内さんの生きかたに強く惹かれていった。それは私にはない、妥協しない姿勢であつたり、軸がぶれないことなどがあつたからだ。

織物についてお話をうかがい、谷内さんの生きかたに触れたことで、今まで漠然として考えてこなかった、これからのことに目を向けてみたいと思うようになった。人生の一つの節目となる大学4年のいまだからこそ、仕事に対する姿勢や、人との付き合いかななど、社会に出たときに私はどう生きていきたいかをこれから具体的に考えてみたい。

谷内さんは現在、ほかのネクタイ業者のかたちと一緒に、ネクタイ1万本まつりというネクタイを販売するイベントを、先頭に立っておこなっている。そのイベントで販売されているネクタイは、すべてシルク100%のものだ。

谷内さんはイベントをとおしてこう語る。

「産地偽証や品質偽証は絶対に許さない。お客さんにはきちんとしたものを販売したい。たとえ高い値段のものでもちゃんとしているものであれば売れるもの。ネクタイ生産量日本一の産地としてのブランドの誇りは忘れてはいけない」。

この言葉から、自分たちが自信をもって作ったものをお客さんに販売したいという強い思いが伝わってきた。それに加えて谷内さんは、ものづくりに対して妥協はしないとおっしゃる。その姿勢は、まさしく職人らしい、自分に厳しいイメージと重なった。

妥協しないこと、ネクタイ生産量日本一の産地としての誇り、この二つが谷内さんの軸になっていると思った。この軸がいつもぶれずにあるのが、谷内さんの生きかたなのだ。

広がる世界は 自分のもの

好きを追究すると、自分がいきいきとできる空間が自然と生まれる。今回取材させていただいた石丸なつみさん(21)と小林未祐さん(21)にそのことを教えていただいた。

平岡摩梨菜(社会学科1年)=文
金原由佳(社会学科4年)=写真



本について話す小林さん(左)と石丸さん(右)

谷村第一小学校の横にある細い道を入り、家中川沿いを大月方面に5分くらい歩くと、左手に見えてくるのがつるまち図書室だ。去年の9月に都留文科大学の学生3人が、この図書室を開いた。きっかけは、「本に囲まれた生活がしたい」と思ったことだそう。もともとは3人共通の書庫として、小さなアパートを借りようとしていた。しかし自分の住むアパートの家賃もあるからお金がかかるし、行き来する手間もある。いつそのこと一緒に住んだほうがいいのではということでもシェアハウスを始めたそう。そして、現在では3人共通の書庫が地域の図書室となっているわけだ。

本を中心にまわる世界

図書室のドアを開けると、向かって左と奥の壁にある大きささまざまな本棚が迎えてくれる。その本棚には3人の本に加えて、図書室の利用者

の本も置いてある。これは自分が図書室に貸し出した本の冊数分、本を借りられるというのがこの図書室の仕組みだからだ。ふつうの図書室と違って、本で本を借りるのだ。小林さんは「自分たちとしても、図書室を始めた3人の本だけではなくて、地域の人やほかの大学生から本を貸してもらえたらより一層自分が楽しいし、自分自身が本に囲まれて生活ができる。そういう空間になつてゐるかなって思う」とおっしゃっていた。声を弾ませながらも、とても丁寧に話してくださった。

「コミュニティ図書室としていろんな人に集まってもらえる図書室に」という想いで、つるまち図書室は開かれた。リピーターには遠方から来られるかたも多い。また大学生だと最近一年生が増えてきたとおっしゃっていた。嵐のように小学生がやって来て、勢い良くしゃべって帰っていくこともある。まさにいろんな人が集まる図書室、といった感

オリジナルの読みかた

お二人と本との関係についてもっと聞きたくなったので、いろんなことをたずねてみた。

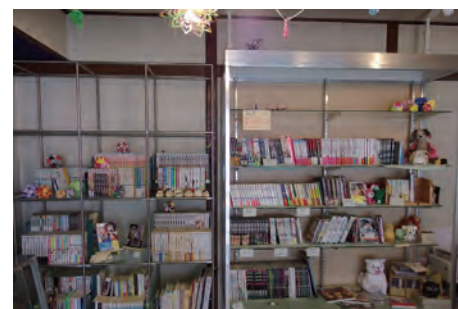
物心がついたときには、すでに本が身近にあったとお二人とも言う。石丸さんは読み聞かせのボランティアをしていたお母さんからの影響が強い。小林さんは小学生のころから2週間に1回図書館に通っていたそう。食事や歯を磨くことと同じように、本を読むことはお二人にとって生活の一部のようだ。

お二人は、それぞれ本の読みかたが違う。小林さんは、そのとき限りで読むことが多いという。だから読み終わると細かいところを忘れていたりするそう。少しあきれたように笑いながら、「数年たつて読み返すと、私この本、本当に読んだっけって思うこともある」とおっしゃっていた。対して石丸さんは、感情整理

や脳のコントロールに本を使うらしい。どうしてここまで読んでなかなか次へ進めないのだろう、邪魔しているものは何なのだろう、と考えながら読み進めるのだ。私はこのような感覚で本を読んだことがないので、未知の世界に触れた気がした。

本好きと読書家

積み本が多い、と嘆く小林さん。石丸さんは、手に入れた本はわりとすぐに読んでしまうそうだが、小林さんは買ったのち、すぐに読まないで置いておくそう。そのときは、「買いたい欲があつたのだから、読みたい欲もいつか来るだろう」と思っているらしい。小林さんが言うには、本がほしいという欲と本が読みたいという欲は違うのだそう。そして、「本は好きだけれど、読書家ほどたくさん本を読むわけではない」ともいう。「そうはいつでも、あの蔵書の量なんだけどね」と私の身長より



小林さん(左)と石丸さん(右)の本棚。ここにある本が全てではなく、自分の部屋にはまだ読めていない本があるのだそう

も大きな本棚にいっぱいの本を指しながら石丸さんは笑う。お二人の本棚には、1段に前後で2列にしなければならぬほどの本が置かれていゐる。そこまでたくさん本を読んでいるなら読書家という言葉がふさわしいような気がした。しかし言葉の認識はそれぞれ違う。お二人を表す言葉はまだこの世界にないように感じた。あえて近いものを挙げるとするならば、本好きなのだろう。

世のなかの言葉に自分を当てはめようとせず、自分なりの形を築く姿はとても憧れる。私も好きなものを

じだ。

始めてよかったなと思うときはどんなときですか、とたずねると「ふだん会わないような人と出会ったり、仲よくなれたり、思わぬ出会いが多いことかな」と石丸さんは答えてくださった。自分の好きなものを通じて出会いが生まれることに、うらやましさを感じた。



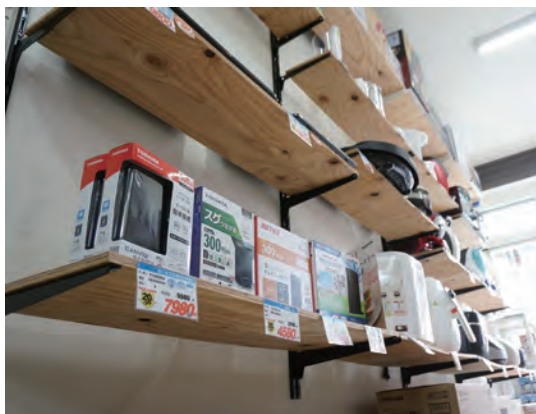
図書室に飾られている編み物。石丸さんが作られたもので、季節によって違うものが飾られる



追究していくうちに自分だけの形ができたらしいなと思った。

今回お話をうかがったお二人とも、今年で大学4年生。今後についてうかがってみた。すると、石丸さんは都留に残って続けていきたいとおっしゃっていた。小林さんも、都留を出ても自分の本は図書室に置いていくと。「都留に帰ってくる理由にもなるしね」と言われていた。3人の境遇は変わっても、図書室は変わらず存在し続けるのだ。

この図書室と同じように、きっとこれからもお二人と本の関係は変わらないのだろう。いつだって自分なりのつき合いかたで本との関係を深めていく。その姿に私は強さを感じたのだ。周りに影響されず自分の世界を作り上げていく。それが誰よりも楽しそうだった。好きが膨らんできた世界は自分をもっともいかしてくる場所なのだと、お二人が本について話す姿から学んだ。



大型電化製品だけでなく、ヘアアイロンやかき氷機など、さまざまなニーズに対応する商品が売られている

7月8日、都留市駅から富士みちのほうへ歩いていくとすぐ右手にある「横田電器」にうかがった。古い建物が立ち並ぶなか、茶色地に白文字で書かれた看板の新しさが目立つ。店内には、洗濯機、冷蔵庫、電球などさまざまな電化製品が並べられている。お店の奥へ入っていくと、三人の男性が向かい合わせに座って、パソコンを操作していた。「こんにちは」と挨拶をすると、パソコンの画面から顔を上げてこちらを見た。おそろいの紺色のポロシャツにスラックス。一見クールビズ中のサラリーマンのような装いの三人は、



「横田電器」を経営する三人。左から櫻井康昌さん、横田勝秋さん、石塚直さん

なぜ都留市に
都留市は三人にとって、元々なんのゆかりもなければ、知りもしない土地だった。どこにお店を開こうか全国各地を調べた結果、人がそこそこのいて、ほかの家電量販店

「最高の顧客満足度」を目指して
三人は都留市で横田電器を開店する以前、埼玉県の家電量販店でそれぞれ店長をされていた。県内の各店舗の店長が集まって、お店の経営方針を決める話し合いのときに知り合ったという。
商品を売るときに、ただ品物売るのではなく、接客の丁寧さや親切さを大切にしたいという共通の思いを持ち、三人で起業した。石塚さんのスマートフォンには、会社をやめるときに撮った、三人でこぶしを合わせた写真が保存されている。ただでさえ、会社をやめるのには勇気がいるのに、店長という立場を捨てて起業するとなると、そういう覚悟が必要だっただろう。

が十キロメートル圏内に一つしかない都留市に決めたという。
首都圏だと、いきなりお宅に訪問したところで、まったく聞き入れてもらえないことが多かった。都留市では、話を聞いてくれたり、口づてにほかの人へお店のことを紹介してくれたりする人が多いそう。石塚さんは、「仕事で外を歩いていたら、地域のかたからお菓子をもったり、『飯食ってけ』なんて声かけてもらって。それってお金以上のものだよね」とおっしゃる。人と人とのつながりの「あたたかさ」を感じられるところが、三人のやりうとしていることと合っているという。



おもに話してくださった石塚さん。わかりやすく整理して話してくださったので、頭の回転が速いと感じた

まちのでんき屋さん

去年の12月に都留市駅前に開店した「横田電器」は、埼玉県でサラリーマンをしていた男性三人が経営している電器屋さんだ。現在、都留市で電器屋さんを見かけることはほとんどない。どんな人たちがお店をしているのか、なぜ都留市でお店を営もうと思ったのか気になってお話をうかがった。

今村遥香（社会学科3年）＝文・写真
加藤萌香（初等教育学科4年）＝写真
黒澤瑞保（比較文化学科4年）＝写真



仕事の話をする三人は真剣かつ、とても楽しそう



黙々と仕事をしていた横田さんが、話がそれそうになると戻ってくれたり、質問にズバリと答えてくださった

都留市でお店を開いてみて

三人で話し合いをかさね、さまざま準備をして迎えたオープン初日。石塚さんは当時のことを思い浮かべるように目線を上に向け、嬉しそうにおっしゃった。「朝早く起きて、『いよいよオープンだね』って前の会社をやめるときと同じように、三人でこぶしを合わせて。これだけやったからお客さん来るだろうって期待して、スタートしたんだけど」。そして下を向き、笑顔を一変させ、厳しい表情でこう続けた。「当然、オープンの日なんて誰もこないです。うん、現実ってこうだねって。良い意味でも悪い意味でも、そういうスタートを切った。勝手に埼玉県から来て電器屋を始めますって、誰が買うって話じゃん」。

そんなほろ苦いスタートを切り、これからどうしたらこの地域に根付けられるかを考えさせられたという。そこで、まずは「横田電器」のことを知ってもらうことが第一だと考えた。若者には、SNSで商品の情報を提供し、高齢者には、店長をしていたときに培った技術で折り込みチラシをつくって、情報を提供している。

開店から半年以上が過ぎ、地域に根付いている実感があるかどうか尋ねると、横田さんは「徐々にだと思う。まずはお話をいただいたお客様から、しっかりと満足してもらえるように。そうすれば、リピーターになってくれたり、ほかの人に紹介してくれたりすると思うんで。今は一步一步着実に」と一点を見つめながら話してくださった。

都留市での変化

櫻井さんは、埼玉県で働いていたときに得た知識や経験が、都留市で仕事をするときの土台となっているという。そのうえで、さらに経験を積んで、お客さんがなにか困ったことがあったときに、「横田電器ならなんとかしてくれる」と思ってくれるような会社を目指している。

さすが駆けつけられることや、お茶を飲みながら雑談していると、お客さんから「こういうのがあったらいいな」という要望を聞いたり、石塚さんから「この電球いまのままで大丈夫ですか？ もっとおすすめのものがありますよ」と提案できたりするという。一人のお客さんに対して、自分が思い描いていたような丁寧で親切な対応ができ、納得のいく時間をもてるようになったという。

三人の関係の変化

お客さんが一日に二、三組来てくれるようになったり、暑い日にエアコンが壊れたと電話がきたりと、開店してから半年のあいだに三人の想像以上のスピードで、「横田電器」のことが広まっている。

埼玉県でそれぞれ店長をしているときは、会社には雇われる側だったが、都留市へ来てからは経営者になった。自分たちで経営するとなると、楽しいだけでは会社が立ちゆかなくなってしまう。自分たちで決めて、自分たちだけで動かなければならないので、仲よしこよしではいけないという。ときには、言いたくないようなことを言ったり、言われたり



大きく身振り手振りをして、話す櫻井さん。熱意が全身から伝わってくるような人だ

指している。またお客さんと接しながら、これまでの自分の行動や判断があっているかどうか、確かめながら働いているそう。「もつとこうしたほうがいいんじゃない」という意見をくれるお客さんは貴重な存在なので、その要望に応えたいという気持ちで、どのように対応すればいいのか考えながら向き合っているという。

石塚さんは、お客さんに使える時間が増えたという。以前勤めていた家電量販店では、お客さんの回転率をあげることが最優先されていた。そのため、一人のお客さんに時間をじっくりと使う余裕があまりなかったそう。けれど、今はサービス面を重視しているので、一人のお客さんとじっくりと関われる。たとえば、お客さんから電話をもらった

することもある。石塚さんは、「この会社を存続させたい」という共通の思いをもっているからこそ出る言葉だとおっしゃる。「この会社を続けたいと思うから、ぶつかり合うし、ギクシャクすることもある。それがなくなったらおしまいだと思っている。俺の思いとしては、この三人でやっていくんだというのがすごいある」と、石塚さんはまっすぐこちらを見て語ってくださった。

* * *

家電量販店が大勢のお客さんに大量の品物売るのに対して、まちの電器屋さんは少数のお客さんに品物売り、接客や購入後のサービスも商品価値として提供している。取材では語られなかった困難なことが、いろいろとあっただろう。しかし横田電器の三人は、約半年間で地域に溶け込み、「まちの電器屋さん」になりつつあるように思える。それは、お客さんに満足してもらいたいという共通の思いをもって、お客さんの声をしっかりと聞く働きぶりが地域の人に伝わってきているからだろう。これからさらに、地域の人から頼りにされる会社になっていくと私は思う。

三浦養蜂園

前編 身近なミツバチ

私が「養蜂」と聞いて思い浮かべるのは、巣箱に入ったたくさんの蜂や重装備の養蜂家。私の生活とは離れていると思い、身近に感じたことはなかった。本やテレビでしか見たことのない養蜂とは、どのようなものなのだろうか。

山内利奈（社会学科2年）＝文・写真
高橋未瑠来（社会学科3年）＝写真



忍野村の養蜂場。手前右には空箱が積まれていて、奥の箱にはミツバチの巣がある

6月27日の午前6時30分ごろ、都留市十日

市場にある養蜂家のお宅にうかがった。玄関のドアのガラス越しに、ひとりの男性が立っている。三浦正朗さん（80）だ。三浦さんはこの道60年のベテラン養蜂家である。道に迷ってなかなか来ない私たちを待ちかねて、玄関でようすをうかがっていたのだろう。申し訳ない気持ちで挨拶をしてなかに入ると、快く奥の居間へと案内してくださった。

部屋に入るとまず天気の話になった。「ここ5、6年は九州みたいな雨の降りかただよ」と三浦さんはおっしゃる。シトシトというより、いつきにザーッと降る雨が多くなったそう。天気と養蜂には深い関係があるため、三浦さんは天気にとっても敏感だ。ミツバチは天気によって働きかたが変わる。晴れていれば巣から約4キロメートル四方の距離を飛び回って、花から蜜や花粉を集めてくる。しかし雨が降ると、羽が濡れて飛べなくなるので、あまり箱から出ない。晴れた日に仕事はかどるのは、私と似ている。ミツバチに共感するなんて初めてだ。

三浦さんが飼っているハチは、「アメリカ・イタリアン」といって、原産地は地中海沿岸

だ。セイヨウミツバチとよばれる多くのハチはこの種だという。日本では明治時代に養蜂用に輸入されたそう。

蜂蜜は味も、香りも、ミツバチが集める花によって違うという。そして、同じ種類の花でも採れる場所、季節によって蜂蜜の味は違うそう。この味の違いは、自然の食品ならではの味。いつか私もこの味の違いを感じられるようになりたいものだ。

ミツバチの役割

三浦さんはサクランボ、カキ、カボチャを作る農家のかたにミツバチを貸している。昔は野生のミツバチも、ほかの昆虫もたくさんいて、受粉の手助けをしていた。しかし、農薬をまいたり、レンゲやクロバーなど、ミツバチが蜜を採るのに適する植物を人間が減らしたりしたため、環境が変わって虫が減ってしまったのだ。だから今は、養蜂家が農家にミツバチを貸さなければ、農業はほとんど成り立たない。三浦さんはそう言い切っていた。私たちはミツバチの働きに助けられて、たくさんの農作物を口にしているのだ。

いよいよ養蜂場へ

お話が一段落すると、「蜂を見るつちゆこんだね」と三浦さんがおっしゃった。

午前7時30分、養蜂場に向かうため腰をあげる。外に出るやいなや、お庭にある箱の中身が気になった。尋ねてみると、それは蜜蝋（みつろう）という「ロウ」だという。蜜蝋はミツバチの分泌液に熱と圧力を加えたもの。あるいは湯で煮溶かして採取される。天然のワックスとして利用されることが多く、肌にやさしい素材だ。蝋燭のような触り心地で、べたつきはあまりない。蜂蜜のような甘い香りと、



三浦さんのお宅のお庭にあった蜜蝋。ハンドクリームや練り香水など、化粧品原料として使われることが多い



ミツバチは三浦さんを覚えるのだろうか。素手で持っていても刺されないことが不思議だ

チに煙をふきかけておとなしくさせるためのもの。モクモクと煙が立ち始めたら、三浦さんはネットで顔を覆う帽子を被り、養蜂場へと入っていく。そんな軽装で入っているんだ、と私が驚いているうちに、三浦さんは巣箱の蓋を開けて作業を進めていた。「私たち

もなかに入っているんですか」と聞くと、すぐに「ああ全然いいよ」と三浦さんは答えてくださった。肌は出ているし、三浦さんのような帽子も被っていないが、初めての養蜂場に興奮を抑えきれず巣箱に駆け寄る。いつも小さな虫が飛んでくるだけに避けてしまいう私が、このときは自分からハチに近づいていた。恐怖よりも好奇心が勝った瞬間である。巣箱のなかには縦25×横35センチメートルほどの板がおよそ17枚あって、両面にハチがびつしりと張り付いている。耳を澄まさないくてもブーブーとハチが動き回る音が聞こえる。こんなにハチが活発だとは思っていなかったたので、私はしばらくのあいだ「すごい！」を繰り返してしまった。三浦さんはふわっと煙をまき、エサは足りているか、蜜が順調にたまっているか、卵を産んでいるかなどを確認する。ふだんは砂糖水をエサとしてあげているそうだ。2つ目の巣箱を確認しているときに、ちょうどミツバチの天敵であるキイロスズメバチがいて、ミツバチの子どもを食べていた。三浦さんはそれを刃物で一撃する。ミツバチを天敵から守ることも養蜂家の仕事なのだ。



ピントがあわないほど動き回るミツバチ。中央の小さな穴が埋まっている部分は、サナギがあり、花粉や蜂蜜の貯蔵もされている

私はミツバチに対して、蜂蜜を作り、攻撃的な虫というイメージを持っていたが、今回三浦さんのお話を聞いて、その考えは変わった。天気によって行動が変わるという、私と似た一面を発見し、親近感が湧いた。そして日ごろ私たちが何気なく口に入っている食べ物を作るために、ミツバチが活躍していることも知れた。ミツバチと私たちは密接に関わっているのだ。それが分かったいま、ミツバチは私にとってぐっと身近な存在になった。

写真はすべて2016年6月27日に撮影しました。



巣箱のなかには

三浦さんは車を降りると、先端がとがった金属の入れ物に火をつけた紙を入れ、煙をおこし始めた。これは燻煙器くんえんきといって、ミツバ

この日は都留市の西に隣接する忍野村にある養蜂場へ案内していただいた。国道138号線から脇の山道のようなところに進んでいくと、ミツバチの巣箱が並んでいた。まわりは木や草が生い茂る。すぐそばにはクマを捕獲するための檻が設置されている。以前に3頭も捕獲したことがあるそうだ。私はいままで養蜂場と聞くと、地面やまわりの草木が刈り取られ、開けた場所にあるようすをイメージしていた。しかし、じつさいは森のなかで、ありのままの自然が残っている場所だった。

焦げたような香りがかすかにした。三浦さんの養蜂場は山中湖村、忍野村、大月市笹子町、甲府市、韮崎市の5か所にある。ハチは暑すぎたり寒すぎたりすると、産卵数が減ってしまう。そのため、時期によって巣箱を移動させることもある。また、複数の場所に置くことによって、さまざまな植物の蜜を集められるのだ。



右：私服のまま作業をする三浦さん
左上：紙に火をつけて燻煙器のなかに入れる。10分ほどは煙が出続ける
左下：1箱に約2千匹のハチがいるそうだ





つるのひとこま #4

都留市で暮らしているから気づく季節の変化、思い出のできごと、地域の行事、家族の成長を知りたい。地域のかたがたがカメラにおさめた都留市のようすをご紹介します。

都留市民のかたがた=写真
『フィールド・ノート』編集部=文

＼ つる探検隊 ／



くまさかゆういちろう
お名前：熊坂雄一郎さん(30)
撮影日：2016年5月5日
@禾生第二小

＼ 注文品よりサービス品！ ／



お名前：わたなべ。(20代)
撮影日：2016年6月22日
@上谷の純喫茶「旅苑」

＼ 酒米プロジェクト進行中 ／



さいとうたくや
お名前：斎藤卓也さん(42)
撮影日：2016年5月25日
@大原



なかむらよしひで
お名前：中村吉秀さん(32)
撮影日：2016年6月25日
@田野倉のガソリンスタンド

募集要項

- ・お名前、撮影日、撮影場所
- ・年齢（年代だけでも可）
- ・写真についてひとこと

写真はこちらまで

✉ field-1@tsuru.ac.jp

〒402-8555

山梨県田原3-8-1

都留文科大学4号館1階 地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部

センサーカメラが 写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、本学のうら山にセンサーカメラを設置して、動物の調査をしています。今回は4月～6月に撮影された動物たちの姿をご紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

※動画を切り取った写真



ニホンジカ
2016.04.16

角の生え始めである「袋角^{ふくらづの}」が見て取れます。角が生えていることからオスであることがわかります。



オオコノハズク(写真上)※
2016.05.25

およそ30秒にわたって、地上を移動する野ネズミ(写真下中央)を目で追いかける姿が撮影されました。



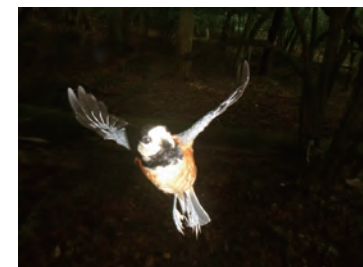
イカル
2016.05.25

林内の水場ではほかにもカケス、ヒヨドリ、ミソサザイなど10種以上の鳥類が水浴びする姿が撮影されます。



テン
2016.06.09

顔や背、足が黒くなり、夏毛への生え替わりが確認できます。登山道や倒木の上で糞をよく見かけます。



ヤマガラ
2016.06.10

センサーカメラの箱が木の洞(木などにできた穴)に似ているからか、箱に入ろうとする姿が撮影されました。



ヤマネ※
2016.06.10

コウモリ用巣箱で撮影されました。四肢でしっかり体を支え、幹上でも素早く動く姿を見ることができました。

コラム 都留でつけた生きもの

トラツグミの巣

トラツグミは1年中、都留市で見られる鳥ですが、その数は多くはありません。本学のうら山に設置されているセンサーカメラにもときどき写りますが、生息状況や繁殖生態はよくわかっていない鳥です。

2016年6月10日、偶然トラツグミの巣を見つけました。トラツグミの巣は林道脇のフサザクラの枝上に作られていました。巣材はコケを多く使っており、フサザクラの幹に生えているコケとあいまって見事に巣が隠されています。6月17日に巣を見に行くと、1羽が巣に座っていました。卵か雛を抱いているのかと思われます。7月1日には巣内に親鳥やヒナの姿は見られなかったものの、巣の周りで複数のトラツグミを確認しました。トラツグミは繁殖期になると夜間も活動します。夜間もヒナに食物を運んでいるのでしょうか。今後、観察したい事柄のひとつです。

西 教生(本学非常勤講師)=文・写真



(2016.06.17)



次回予告

あ
さ
ひ
そ
し

朝日曾雌へ（仮）

―都留市の東端、桂川の支流朝日川・大平川流域の山あい位置する地―

2016年12月発行予定

FIELD
NOTE

no. 90 Sep.

発行人

北垣憲仁（48）

統括編集者

西教生（44）

編集長

伊藤瑠依（4-5,10-11）

舟田早帆（1,48）

副編集長

長尾泉（2-3,18-20）

南條新（6-7,22）

編集

加藤萌香（12-13,21）

金原由佳（46-47）

黒澤瑞保（32-33）

今村遥香（36-39,45）

小俣溪和（4-5,8-9,44）

高橋未瑠来（2-3）

窪田りさ（23-25）

山内利奈（40-43）

江利そらむ（26-27,45）

小泉篤広（14-15）

佐藤琢磨（30-31）

杉浦茜（28-29,46-47）

高橋光（1,17,48）

平岡摩梨菜（2-3,16,34-35）

ロゴデザイン

工藤真純

〔 〕は編集担当ページ

FIELDNOTE（フィールド・ノート）90号

発行日：2016年9月22日

発行部数：700部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

「夏が来た」と思うとき

ひ ざしがじりじりと照りつける昼下がり。とくにゆらゆらと蜃気楼が見えるくらい暑い日は、本学で設置しているライブカメラに両手足を広げ眠るムササビが写ります。じっとしてられないと言わんばかりに、あっちへこっちへ、ごろごろと転がり、寝かたをかえるムササビ。きっと寝苦しくてたまらないんだろうな、とムササビの気持ちになりながら見ると、画面越しでも暑さが伝わる気がします。ふだんは見られない姿が写るので、体の構造や個体の特徴を見つけるチャンスです。（加藤萌香）

や きにくは一年を通して私の力飯ですが、シメに冷麺を食べるのは夏ならではのことです。先日の帰省最終日に、母が行きつけの焼き肉屋に連れて行ってくれました。お腹いっぱいになるまでお肉を食べたら無性に冷麺が食べたくなって、母に聞くまでもなく「冷麺ください」とお店の人に言っていました。しばらくして運ばれてきた冷麺はどんぶりより大きなガラスの器の中央にちょこんと盛り付けられています。たっぷりに入ったつゆと器のゆとりがなんとも涼しげでした。（江利そらむ）

け ろけろというカエルの声。カナカナカナというひぐらしの声。ちりりんという風鈴の音。からころと響く下駄の音。私は、耳で夏を感じることが多い気がします。なかでも私のいちばんのお気に入り、地元のお祭りの太鼓の音です。私の地元では毎年開催される大きなお祭りがあり、この太鼓の音を聞いて夏が来たことを実感します。でも、今年は聞けそうにありません。私はこの土地ではじめての夏を迎えたばかり。都留でもお気に入りの音を見つけたいから、耳をすませて夏を過ごすことになりそうです。（高橋光）

奇妙な食べ痕

撮影日(2016年5月25日)



これは、うら山で見つけたニホンリスの食べ痕です。どちらもクルミの実を食べた後の殻ですが、左手にあるのが今回見つけた、奇妙な形の食べ痕です。

クルミの殻には繋ぎ目があり、ふつうリスはこの繋ぎ目に沿って殻を割ります。すると右手に持っているような食べ痕となり、これはうら山でもよく見られるものです。けれども今回見つけたものは、繋ぎ目を無視し、クルミを輪切りにするように殻が割られていました。

このような食べ痕はこれまで見たことがありません。どうしてこんな割り方をしたのでしょうか。謎は深まるばかりです。

現場に行くとは予期しないものに出会える。そのこともフィールド・ミュージアムの魅力です。

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは? : 私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留を拠点として富士山とその山麓、桂川(相模川)流域に注目して活動しています。

名称について : 大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターがこの活動を担っています。